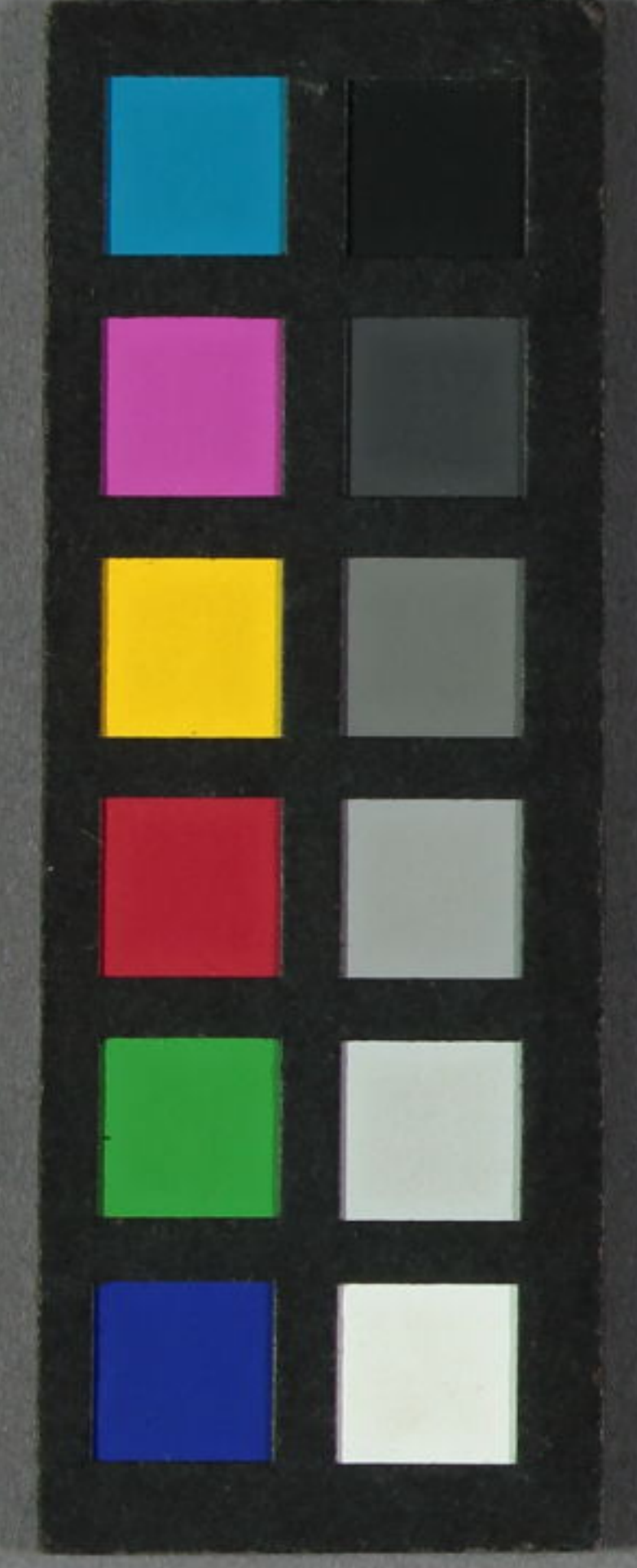


俳人百家撰  
全





綵亭川柳輯

俳人百家撰

雄齋國輝圖

和永七卯新撰  
東邦甘家書肆

史依此の古余和歌集子出せ世々小風骨は...  
其是は遠く守武宗繼を祖と一貞徳子式を...  
宗因は淡林の一派をびこり芭蕉翁中興之志ありし  
より黄きも跡きも依を学ばざるハ形く句集は後法  
玄砂の数を知らぬと皆狂心なればめく歌仙の色紙  
紙一自に福一その百韻の世情を考一みよく望の者  
此は松島の高の秋乃こを是は法根のねもごろみ世も傳へぬこと  
筆許あるやその中子事法は空置する祝直く又なる風  
調られ彼原集く書裏ふ所ふれ玉の都ふが法書はひあ  
ぬく只古を志のふんりく遠く俳人る權ふあぬ志はふ東州の  
のりそあごふ依れれも字を吐く人を欺くやうにハ何とせと  
書封の求ふるこふ是智者の眼子ハ...  
其趣ひとありねんはしとほつうりせも...

和永八卯新撰



和永八卯新撰

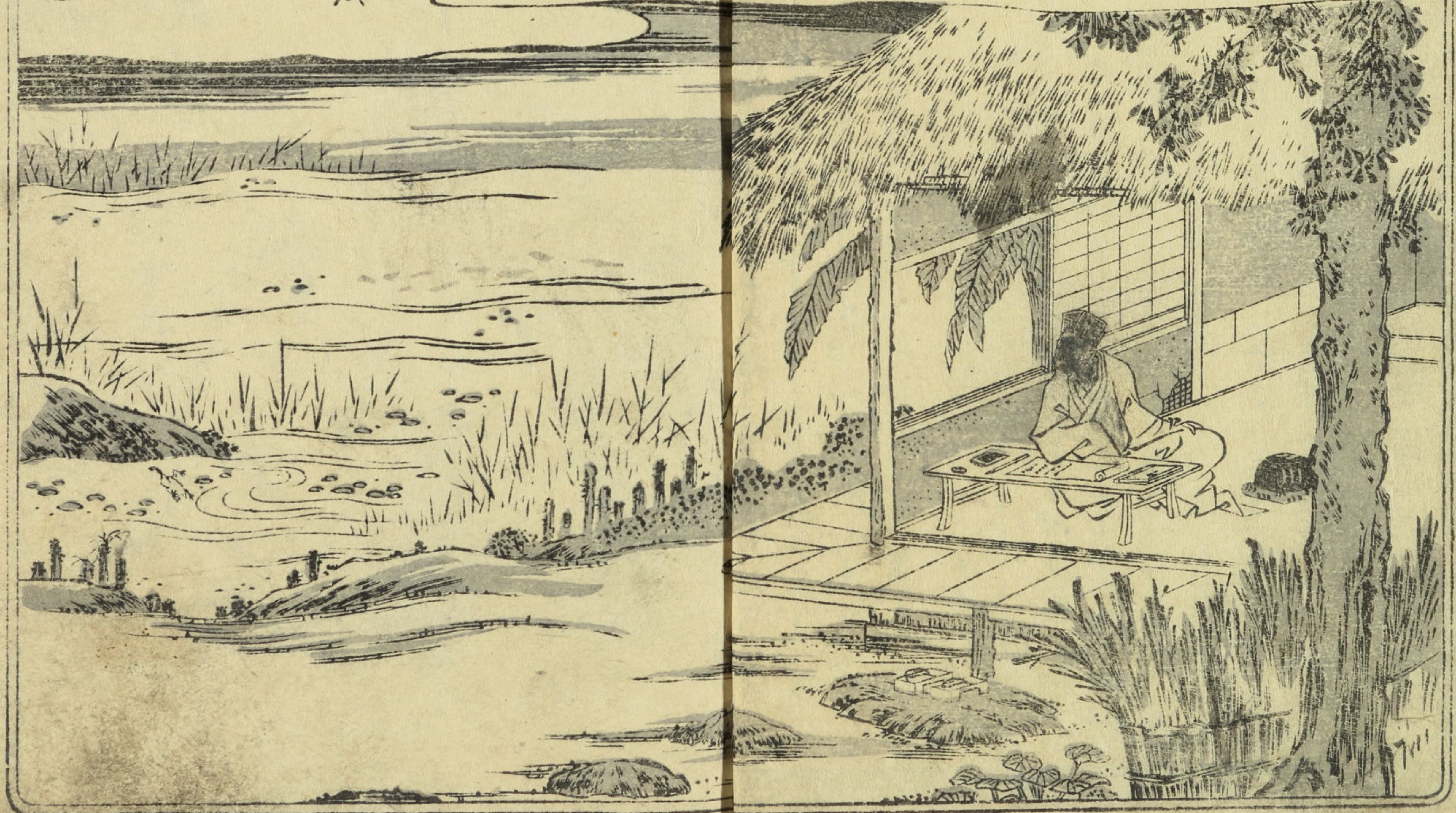
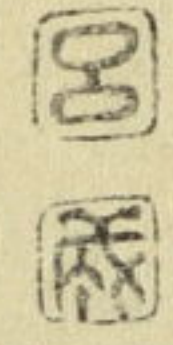




芭蕉庵の旧地ハ  
 深川六間堀要津  
 寺同所長慶寺ハ  
 古墳ありと云佛頂  
 禪師現住の地ありて  
 翁由縁の寺あり  
 古池の吟ハ今の  
 松平遠州侯の庭中  
 小存せる池ありこの  
 辺ハ昔庵の在る  
 此句より延室の末  
 桃青伊賀の上野  
 と出て江戸小下り  
 後推しして書宣と  
 改又杉風より芭  
 蕉庵の号と譲請  
 て夫ありのち彼地ハ  
 庵を結ぶ此古池ハ  
 原杉風が蘆みて  
 ありしぞ

古池や  
 蛙花こむ  
 水の音

應需  
 多魚端墨





先哲中排



貞室

宗因

玄魚模

芭蕉

貞德

立圃莘

守武

宗鑑

百作



芭蕉十哲

蕪村筆意

去來

許六

北枝

支考

其角  
丈草

嵐雪

野坡

曾良

越人





文徳坊の假名遣の浦抄の  
 さまよひ新撰つゞきと云  
 けり万葉集よみむ出持の依  
 保川の氷をせたる今昔  
 田舎といふかゝるは橋も  
 せむらねとよみかゝる  
 のしこれぬぬぬぬぬぬ  
 雲のふりては又あかぬ  
 と業平法師のかゝる  
 布と能のまほ  
 何れもれせよむら  
 せりて山に葉なる想  
 文徳の思ふも人の思ふ  
 子まゝも是を  
 歌は老むや  
 と云

樂翁侯



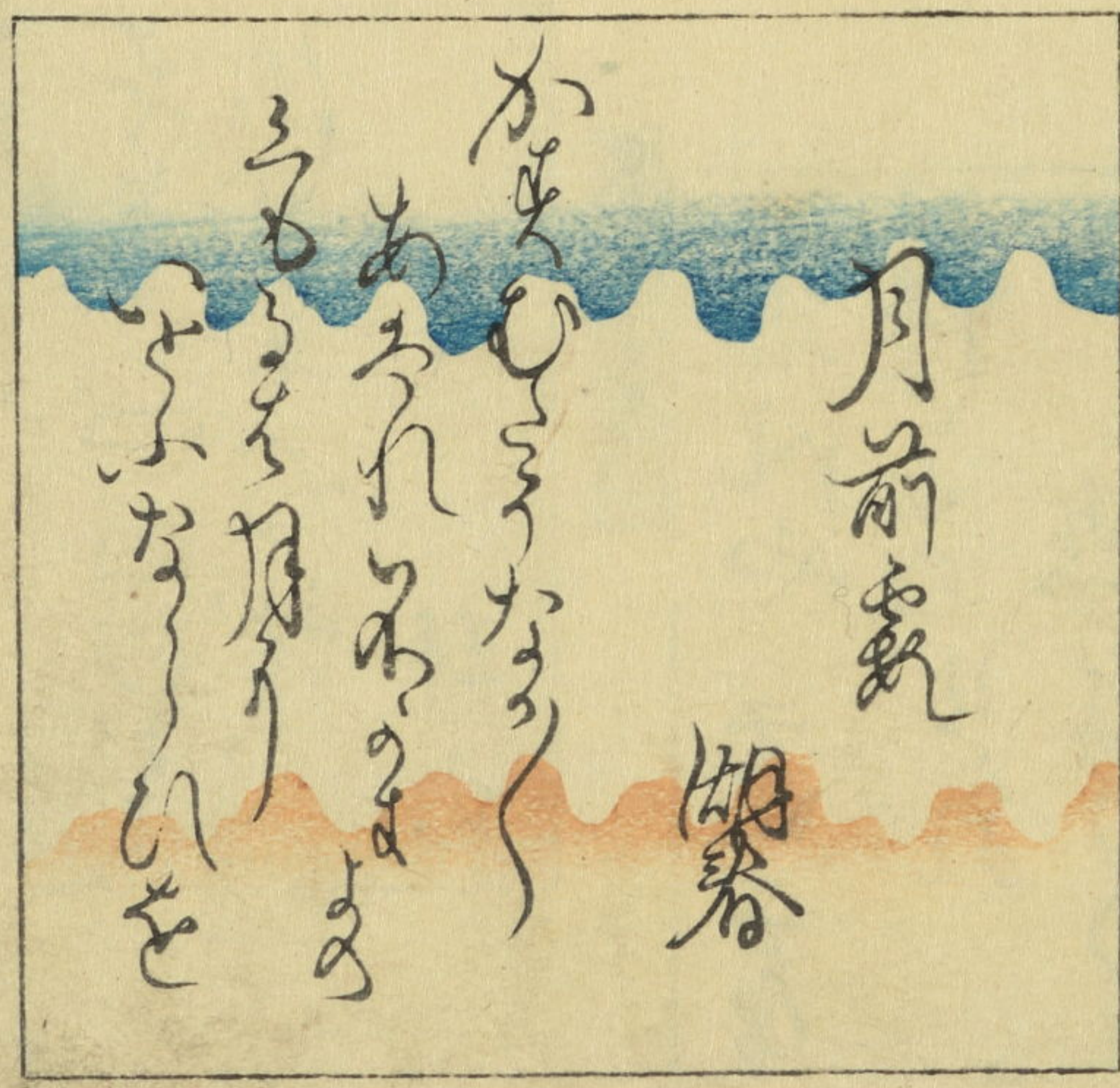
よろひ  
 勇あり  
 老あり  
 仁あり  
 智あり  
 勇あり  
 老あり  
 仁あり  
 智あり  
 の那

古筆手鑑

芭蕉翁

かしら  
 あら  
 とも  
 ねら

北村湖春



月前夜  
 湖春  
 か  
 あ  
 う  
 ち  
 の  
 ま  
 せ  
 ら  
 せ  
 ら  
 せ  
 ら



御古の發句の体

ち花を道多と云くはりしか  
を標せし徳ひより徒ひぬ  
山を死し標せしくたふ鳥か  
風々の飛を標せし鳥の花  
...  
みされも雨カを標せし鳥  
花の多々を標せし鳥川  
友山や鳥の標せし鳥の鳥  
...  
水はけは鳥を標せし鳥を  
...  
その鳥武の鳥を標せし鳥  
...  
鳥の鳥の標せし鳥を標せし鳥

番面



煤標の  
木のダ  
柳のる  
大ユウ船  
ませ成



幣あり  
初あや  
汗も  
やこ  
まも  
夕  
まも  
立甫



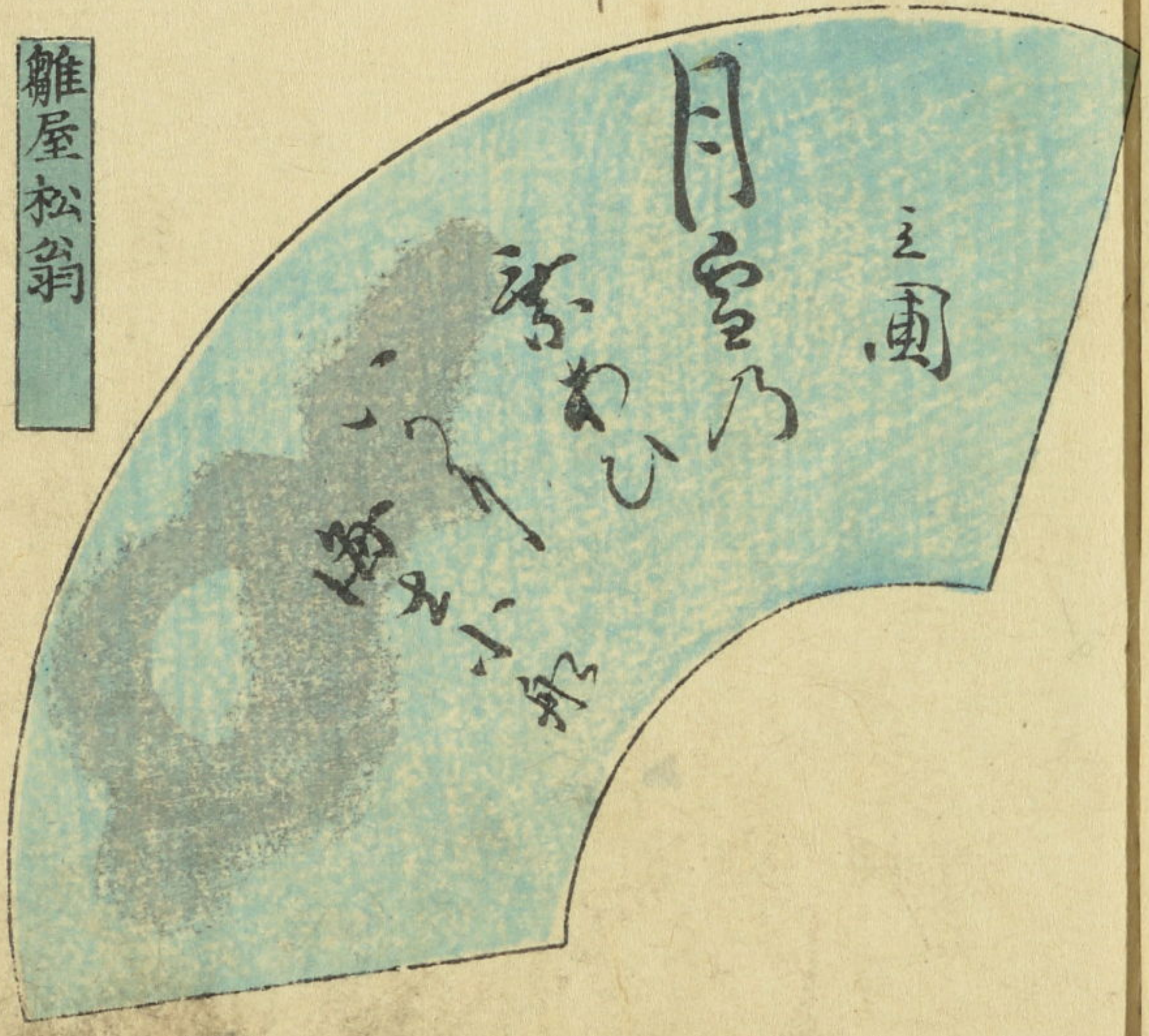
鏝師  
政の  
やせて  
障の  
うま  
さる  
一矢

五老井許六

そのまじけ田の青  
海若ふつれ  
辞六

東花房支考

東風也 運二  
傳子の 月影  
燃なる



離屋松翁





宝晋齋

燧子や 其角  
油を  
金の子

大高氏

山をぬくか  
松のちり  
子葉

松任素園

雪〜ゆき  
初〜はつ  
子代



ものゝほひ  
 徳物や  
 まよひ  
 よこま  
 女月白羽紅



鞠師  
 いてやま  
 うま  
 花の目  
 もろ  
 孔日 咫尺



弓師  
 箏の  
 とた  
 去来  
 弓の外



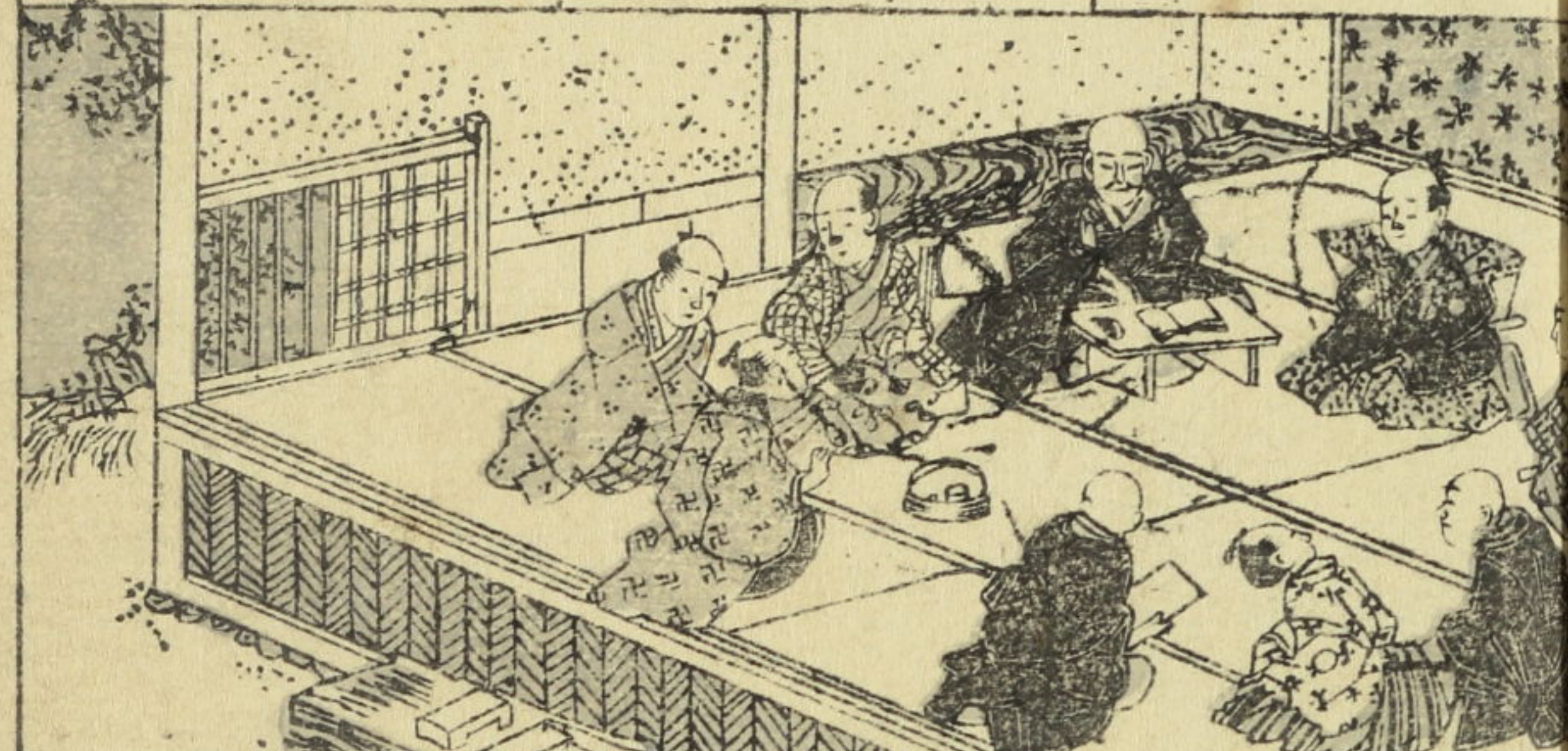
土器作  
 ぬきま  
 大ね  
 初り  
 任



連歌師  
 秋人  
 うさ  
 やろ  
 牛  
 きん  
 ト宅



扇拵  
 若  
 くつ  
 扇  
 吉原

其角が庵の後小尾花の生花  
 一と新入あり他ありなるは文七と申  
 元結と申すは世をその端ありんと  
 あつとひいとりの其角冷々々々  
 文七がゆきぬる者のかろかり  
 けり後と申すは菅原相正初年の  
 時牛の子れ後小尾牛の赤を懐中  
 牛の子れをまゝにたむの娘牛  
 法のありとてはもはるゝのこた  
 文七の白きまは安ありとては其角  
 夫神を信すとて海へは後後初  
 の以たの辺をたぬ春とてはるま  
 入るにけり踏満すてはまの海へ  
 一里とては初まありとては其角  
 いまもいふはわはるゝのこた  
 トなまがまゝは陵子のちりて  
 其角をど春にけりこりり  
 其角陵子をたぬるれは夫林  
 の像ありて人あり其神あり  
 其角の仕方とてはわはるゝのこた  
 あくは小蛇とては毒入りあり  
 杖を指毒の外を打て喰ひ舞  
 とひはけり野及是利まはる小野  
 の首の教とては田唄とては  
 盤柱と申すは白貝とては色近世  
 まはる其角とてはめがめ雨を名  
 く世ふははれとては後三年のま  
 四圍とては二つ雨とては春も  
 花果るとてはるゝの娘及教書  
 板中天神の社とては雨乞の佛  
 良初ありたる時百花が書ふ  
 神風の雨とてはるゝの娘  
 これより後文七の月ありて百  
 顔とてはるゝの娘ありとては二日二  
 夜ふりけりまをゆ道とてはる  
 りいとあり其の慈ひをまら  
 ればわまのこりては其角を  
 けりとてはる



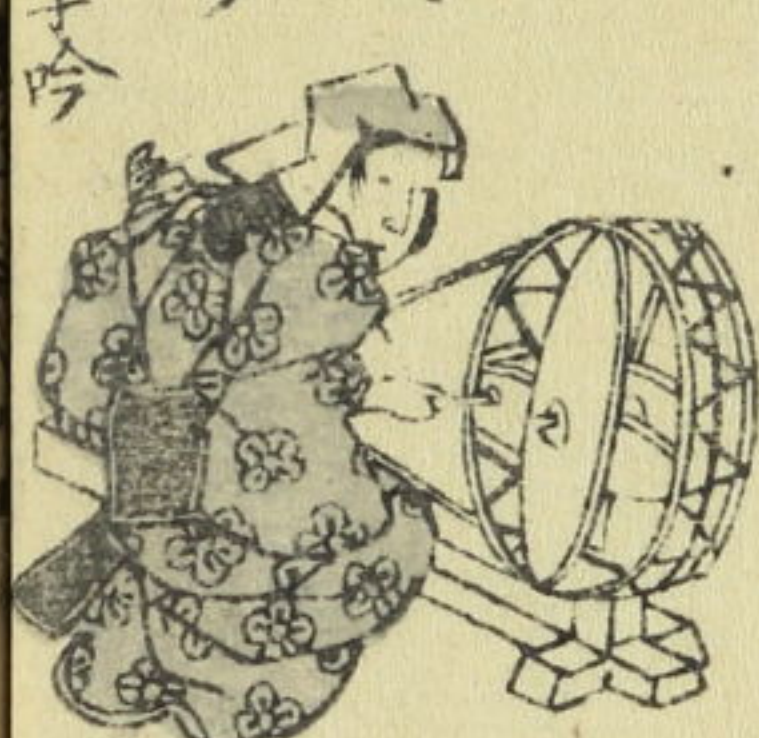
薬賣  
いざり  
浮世の  
風解



壁ぬり  
去年の  
土ぬり  
しるし  
俊似



糸さ  
腹筋と  
よりこ  
笑ふ  
糸焼  
黍吟



糸さ  
腹筋と  
よりこ  
笑ふ  
糸焼  
黍吟



綿ほき  
中ね  
命  
はち



足駄造  
下駄斗り  
鬼貫



元禄のそとめ春かどとれたつるや  
いつこの御座をさかき草薙ぎの依  
頼ひせり木白堂梅隣日及を  
ひも侍ひて江の流日精んこを言  
ひ後海の歌に宿るに旅店の女房  
そ夜を不に臨めるに雪よりう  
まのき板刺若くあふもいませ  
の権子みり、面内をむらも二人の  
目的を定むとさい要するの待とさ  
梅隣ゆいといと為たとなりと並  
符のいりどせとせしつる早連は  
年春ありけしき事主悦みたるに  
おむ人を九條をこれのがらおふ  
「さふふい何をせ」と問ふは梅隣  
とさく  
とく出て又ひるをよ花の兄  
翁これを書いけい道と形ひ  
かこれ若かりとせとさるうん  
しんせりともや

いとわりの御座をさかき草薙ぎの依  
頼ひせり木白堂梅隣日及を  
ひも侍ひて江の流日精んこを言  
ひ後海の歌に宿るに旅店の女房  
そ夜を不に臨めるに雪よりう  
まのき板刺若くあふもいませ  
の権子みり、面内をむらも二人の  
目的を定むとさい要するの待とさ  
梅隣ゆいといと為たとなりと並  
符のいりどせとせしつる早連は  
年春ありけしき事主悦みたるに  
おむ人を九條をこれのがらおふ  
「さふふい何をせ」と問ふは梅隣  
とさく  
とく出て又ひるをよ花の兄  
翁これを書いけい道と形ひ  
かこれ若かりとせとさるうん  
しんせりともや





立君  
女帝  
杖風



渡守  
傘下



炭やき  
危す  
袋の一字



木推  
炭やき  
袋の一字



針押  
娘の  
道り



桶ひ  
永機



大徳二子... 北園... 新の... 炭やき... 渡守... 針押... 桶ひ... 永機... 炭やき... 危す... 袋の一字... 木推... 炭やき... 袋の一字... 針押... 娘の... 道り... 桶ひ... 永機... 炭やき... 危す... 袋の一字... 木推... 炭やき... 袋の一字... 針押... 娘の... 道り... 桶ひ... 永機...







華結  
ぬらふ  
ゆめ  
四方の春  
竹妓



撫子や  
花車  
かきこ  
うら  
越人




鳥帽子を  
きこえよ  
けの月




守武の伊勢内宮の神宮...  
友中...  
達...  
伊勢...  
花梅...  
其...  
風流...  
か...  
竹...  
天...  
天...  
天...


薄雲  
初雪や  
たまたま  
心ゆく夜



宮路  
炭火の  
一夜



奥州  
我...  
一夜




若水  
水...  
染之助



松山  
夜...  
風...



瀬川  
夕...  
や...



荒木田守武  
春柳の  
眉  
岸  
心  
の南













宗鑑の近江氏依りて在義清が末  
孫として支那弥三郎と号し足利義  
高の身任り將軍薨じてより初  
發して山後新の寺に至りて禪法  
を悟道し始て蓮教の心を以て  
しと宗紙の上ふまんことを難  
きと見極め佛僧の心を以てし  
遊道に耽溺するある時物捨り首  
より何人の教をもとの心を冷  
只一向を法下に向あり

こそこの心ありむりありたり  
をを下ふ付ま何の心との向ふ  
も何と直へ宗鑑まで夫れは  
の心あり我々これ等死考ふ  
これおつけてもかひのありま  
是れ何の心との向ふも相成り  
なり

此の時向ありとて天文八年  
高僧ありあると人扇を出して  
何よても多政を預ひけるふ筆を  
きて用けの三角三眼を長  
くも一木一心を示すと前書し  
「あはくありの向をありりあり後  
徳を慕ふ者多くある時大虎の向  
ひて我今日遷りてある疑ひこと  
ある皆迷ふかて快をさるべ」と  
法をを宣ひ既お時いりるそ

宿々天地清濁色  
五妙境界淨刹臺  
三惡火坑何鼻底  
一機不轉古今夏

斯頌を書筆を投山門ふ出空を  
振けは炎焚く火車雲中ふ現れ  
せ候と人の傍り大虎ふむら  
火をまた又もやいで中車の  
のり得て又もはらばらまを  
かく冷して雨さりのあとのみ

元朝の



乃山  
音卷上人

乃山音卷上人



乃山音卷上人  
扇のな







里村昌程の連舟小名さく雲と  
へしなむるれんある舎ふ  
おらぬかひのぬえんあられど  
竹の子のりとうりゆのあふれ下  
びつけくまのあふれありと世ふくは人  
まゝある舎ふ

風もあつたまひのあつたまひ  
さうさへあつたまひ花をそめてこれた  
解さうなればあつたまひあつたまひ  
ふらふらあつたまひ何色のあつたまひ  
のふふ昌程さうさへあつたまひ  
同トエるれどんれ遠ひあり只人  
同様の花をさうさへあつたまひ  
我ハ只こそその花をさうさへあつたまひ  
心の花こそその花をさうさへあつたまひ  
ありあつたまひのあつたまひ

おらぬかひのぬえんあられど  
竹の子のりとうりゆのあふれ下  
びつけくまのあふれありと世ふくは人  
まゝある舎ふ  
風もあつたまひのあつたまひ  
さうさへあつたまひ花をそめてこれた  
解さうなればあつたまひあつたまひ  
ふらふらあつたまひ何色のあつたまひ  
のふふ昌程さうさへあつたまひ  
同トエるれどんれ遠ひあり只人  
同様の花をさうさへあつたまひ  
我ハ只こそその花をさうさへあつたまひ  
心の花こそその花をさうさへあつたまひ  
ありあつたまひのあつたまひ

知の初めの花さくまのあつたまひ  
さうさへあつたまひ花をそめてこれた  
解さうなればあつたまひあつたまひ  
ふらふらあつたまひ何色のあつたまひ  
のふふ昌程さうさへあつたまひ  
同トエるれどんれ遠ひあり只人  
同様の花をさうさへあつたまひ  
我ハ只こそその花をさうさへあつたまひ  
心の花こそその花をさうさへあつたまひ  
ありあつたまひのあつたまひ

里村昌程



舟の  
名  
の  
書  
の  
名

里村昌程

江の  
名  
の  
書  
の  
名

横の  
名  
の  
書  
の  
名



舟の  
名  
の  
書  
の  
名



玄札の行勢山田より出て送附を  
 業とて御借の貞徳の御入りの後  
 一札をあるま生變りて此地よりして  
 御事小治くりつちの御事ついでに  
 を好く徳元彦なるご同時の人を  
 探幽が富士の嶺の  
 名を好くしつちの御事ついでに  
 四十二歳の妻  
 守り多入りつちの御事ついでに  
 番のあつたれつちの御事ついでに  
 ある時癪をひきつちの御事ついでに  
 ろうじつ小治府の御事ついでに  
 弁の苑のちつちの御事ついでに  
 此吟の御事ついでに  
 二體の御事ついでに  
 風流の一徳の御事ついでに

と号し國學の長せり國志の  
 食録若干あり衣冠を海内より  
 一萬葉抄八代集抄枕草紙春  
 曙抄源氏湖月抄をそめて御解  
 をつとる書物五十余部あり  
 御借の貞徳の門よりあるといふも  
 まご二種の雅韻あり  
 富士の山師走ともある御事  
 一僕とせりつちの御事ついでに  
 復ふけつちの御事ついでに  
 地名ありつちの御事ついでに  
 信章に戸ありつちの御事  
 表傷  
 八十五歳ありて安永二年六月  
 卒代也の御事ついでに

高島玄札  
 笑を此  
 のほど  
 免で  
 りのち  
 拾穂軒季吟



友成と  
 拾穂軒季吟  
 なまだ  
 の那









岡田將監の英流大抵の士あり  
けんを文右武のまえをうけ  
小和舟を好むとて一尊道をも  
うたふ人の現意を礼とあり  
和漢の積を拾ひその書をあき  
らめ人も知り世も知れぬ  
能事ありある夏都ふのあり  
近津殿へ見舞ふはまは

五月廿五日よきこころを  
あそむられハ将監  
あへのこのへをこがき務まひ  
祝つけて中よられごとこの外  
みけいひはたさあるとありか  
かけのれ幸ひふあひまをこ  
同様の徳ありなり又行所を泊  
世の特産をまき借鑑ゆか  
凡糸をさそや桐の初紅糸  
尾糸の風ふゆり袖の意

倭に名譽の盲人あり特信海  
くきふ十二律の調子をき物  
善悪を判別を得たりある時  
家ふくうの池を渡をねめて  
音の怪しきを聞き入るは  
その家ふくねるあつては  
みびりこありりまふくを  
人の意うらんは難を  
舞とのみへ能事ハ守武家  
風をきこひ幽妙をあそそ  
天神草納の独吟  
梅あふ八南の枝や北野殿  
とが号のわとを老まつ  
若菜ある光るふ袴の羽を  
月ふあつとをさふふ  
秋風の次ふくうらるあ  
能人ハ侍女その女まは門より  
出雲之八十と案あて  
寛永七年

岡田将監



友や  
見の  
月を  
友や  
見の  
月を

友や

兄を



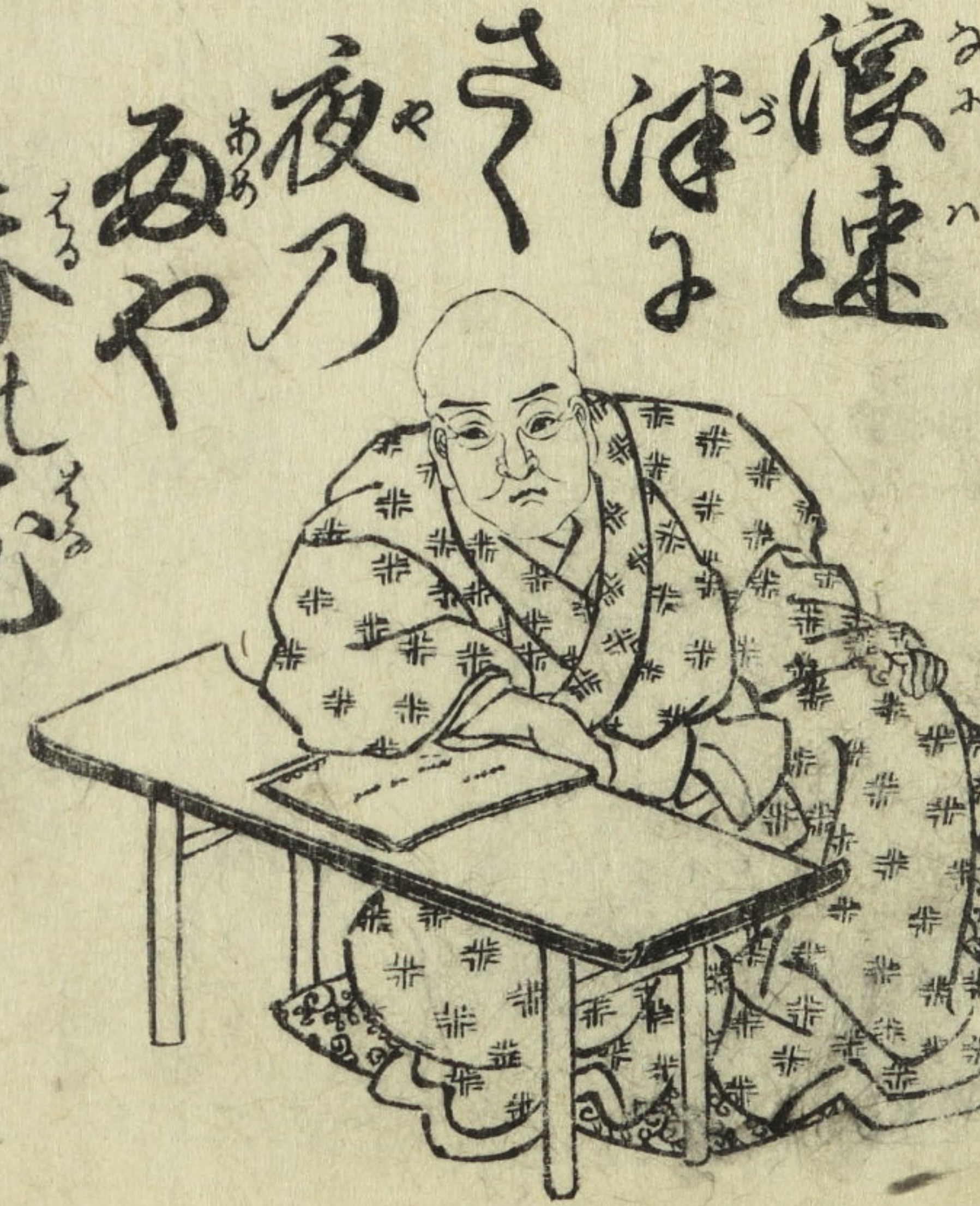
兄を  
可程



梅翁宗因の西山堂豊一とて紀後  
 八代小住せがが加藤家小住ありて  
 のち武門を遠く身を雲水の修行  
 小住せがが花月の餘ふをゆめ一  
 休又小高居一又謝未小杜  
 又猶波天満小縁心保のそめ  
 宗因の寓小澤なる佳所をりて  
 梅翁の名けひるふや梅枝小苑の  
 河をひくれ北窓小雪の力をそ  
 て世小ちかぬ人多く武陽あり  
 佛僧の修林をひくれ兼く盛ふ  
 引てやごころ人由はしふふある  
 夏東山より大返へあるとて  
 其山や威ハ祈ふくは休ん  
 友の友やあつまはしふ月ハ西  
 めるとのこまふ  
 くれ安一とんまごふとせも  
 その一教めて先目

梅翁宗因の西山堂豊一とて紀後  
 八代小住せがが加藤家小住ありて  
 のち武門を遠く身を雲水の修行  
 小住せがが花月の餘ふをゆめ一  
 休又小高居一又謝未小杜  
 又猶波天満小縁心保のそめ  
 宗因の寓小澤なる佳所をりて  
 梅翁の名けひるふや梅枝小苑の  
 河をひくれ北窓小雪の力をそ  
 て世小ちかぬ人多く武陽あり  
 佛僧の修林をひくれ兼く盛ふ  
 引てやごころ人由はしふふある  
 夏東山より大返へあるとて  
 其山や威ハ祈ふくは休ん  
 友の友やあつまはしふ月ハ西  
 めるとのこまふ  
 くれ安一とんまごふとせも  
 その一教めて先目

梅翁宗因



浪速  
 海子  
 夜乃  
 西や

檀林軒松翁



雪折や  
 心  
 かる  
 是れ  
 月称







ト養ハ泉源の産みて牡丹花  
宵梅の来りて若船遊み花びら  
慶友と号し医業も名成梅  
人尊致を課北の左ふありて  
いふ一花女地獄の住し高須と  
のふも愛されト養抱身か  
南北のこみおもごころ  
たご一りのたごころありり  
又伝す小借で

そみよーの本の月の行れ  
ありけりよのせまふそりはし  
晩年 台余ふありて京都  
召れ官給を得りて後地洲  
を為地を將領とされ狂舟  
ト養ハ本道とて思ひし  
うま地をとらふ外科科とそれ  
ト養和學子不通ハ歌能格とゆふ  
長吟小曲あれは柏子ト養とく  
唱へり後法眼ハ昇進とて

西院ハ家因の門下ありて大坂  
終林の一人あり住吉社にありて  
釋冷ニ万二千句を吐きあり母ふ  
二万堂二万篇と称せし又狂舟  
ともいふハ人國學不秀で文章妙  
を以て戯作ハ一代男ハ夜嵐ホをわ  
近松門九郎も門下ありてとらん  
近松門九郎の時代國より人  
来りて西行の才をいへりて  
上野の云々人懐をいへりて終林  
の二風を示せ六齋観して門下  
入る者多し御書も一きの目立て  
平ぶるや多ありて生る花見酒  
朝の花ハ見ぬ里もたらの月  
も持たぬありてこれ衣衣  
元禄六年八月十五日五十二歳ありて  
卒ハ難波ハ月夜瀬ありて葬ま

井ト養

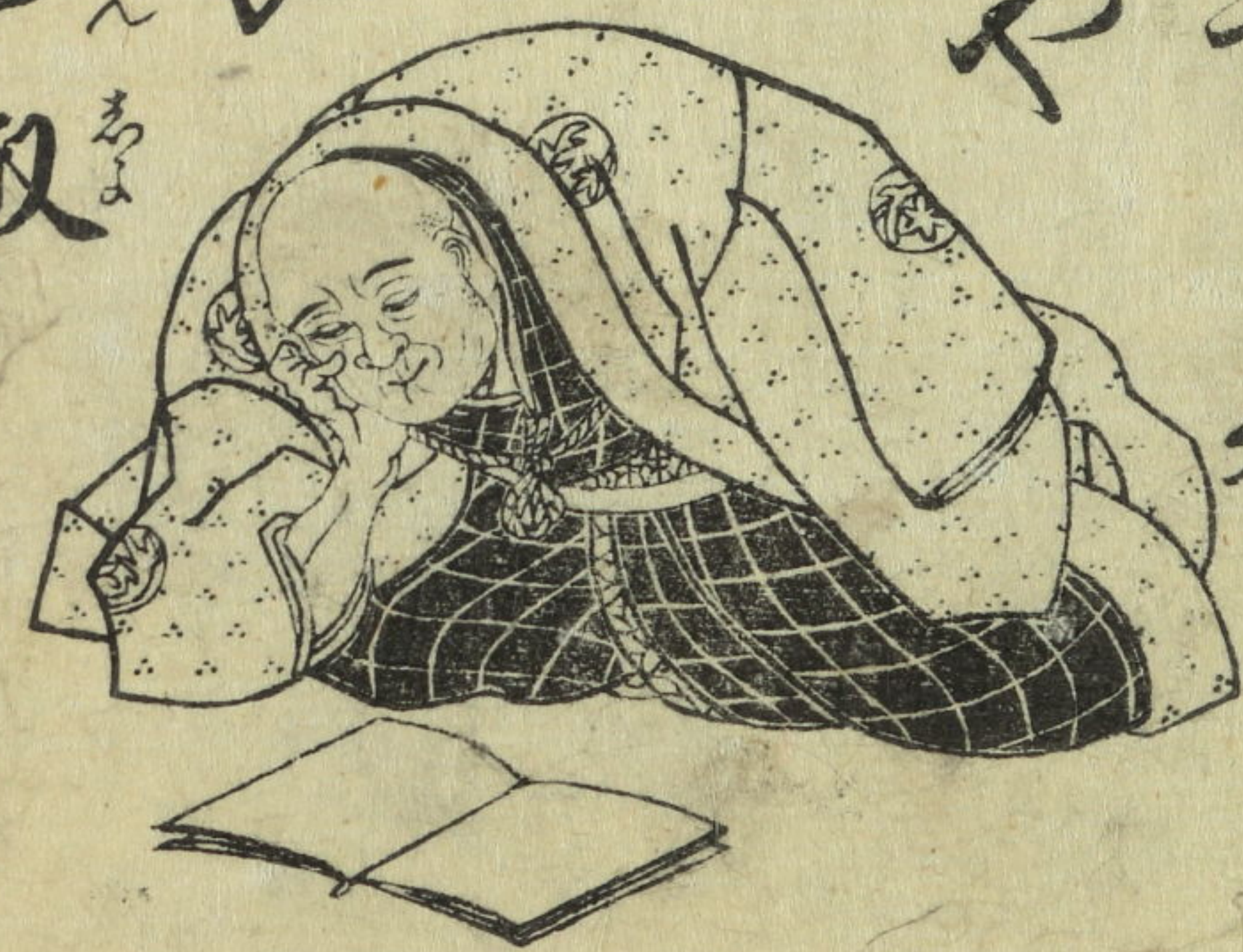
新倉や

六乃

まる

法ぶ

青  
山椒



井東西

大眼目

き

たあ

あ

せ乃

さるあ

のる













惟中へ備前の産すゝめ西一  
 都又剛々堂と名の伊勢の産す  
 船宿をまらび船書小して和舟由  
 よくし金草紙續々名板を書の  
 らし宗周とも交り書くあつとた  
 上佐の信實を画し人丸の影を由  
 とめて宗周の許にわたりきつたれバ  
 文ふして宗周前がたきして

學憲佐作のこめ

影向ありけるあつん

お等の先母のくと宗の學こい

宗周も頗るあつる人こる伴

とえやねふそつめて妻の月

とくちうてえる人久世山さ

ころとめぬ風もるそつりお水

帯ぬるしきまふ旅なる衣づく

除夜ふ

鬼をり細公時ふ方相氏

五十四歳あつて久保五年

自画を引ひそふ草と著して  
 鳥丸家の口説をよむ草紙士は  
 加筆とある意父の遺言の時獨吟  
 九百吟をせくそ中ふ

雲と清くおとの光りや法院を奉

手向ぬる花や九品の浄土粧

花桶の終

花といへばよし甘寝思ひをせとのへ  
 とれの吹雪のれめしあつるよのいづれ  
 は名の本とてあつる昔これつる様  
 の様を捨てようの成妻の中とありん  
 とありそのいそれとて

ハガのころをみ似せそ花の向

なみそとそるは雲の東山

辞也

月花のこ月を今むせつら

寛文九年七十一歳とる致也

三十一

たちの母

中成

あふ

日忠

今朝の

奏

時評佳中

除夜之南

山姥と

終子ハ

名

五回

娘









其前へ東海の小島にて獲奉り母の  
 姓多し医家小産れて排俗を業と  
 せしあま玉の此小僧は後法華丁お福  
 宝井晋子狂雷堂善哉庵の号  
 あり侍を大蔵社尚ふまひきき差  
 志怒画を英一懸て入りけり  
 性ありふ山僧をうけて強き  
 多し酒田小僧の冷天小僧を  
 懸てうへ山僧の排俗と稱して  
 る秀冷多し

怒りて若くはひりりし  
 次への浦にろふ河を深き  
 いしし小箱を千瀬や大井川  
 文急や家なめくして家納め  
 源氏の画ふ  
 傘おも月おくくくきき  
 空山の瘦

ある恩小門の空掃くを食か  
 宝永四年二月廿九日廿七と強を  
 持ゆよくは親ききききききき  
 排て遠くと呼れし戸と冷の雨今時  
 庵夜章といひ西山八百餘を味雪  
 といふは世親を交りし世のち正風  
 体を代とそ文をよく國學を好  
 ぬる白能もまゝ高尚神あり

沈小僧あり坂名あるふ柳が  
 茶の花や利休が自あれた山  
 年もとゆあつて源のつとを死川  
 のろくしあまあがふの月もつと  
 赤川那波小蓮池をやり交を勤  
 晋の意遠く蓮社小僧とより柳  
 社中といふは是より始りて世親  
 同以て家集の身体を慕えられけ  
 せし追若小僧を推し

あまれさや時あつての山家某  
 七十五ありて享保二年八月十五日没  
 感念中程寺院小僧

百非

縮妻  
 や



宝井晋子其南

山口素堂



浮葉  
 六の蓮  
 風情  
 蓮子  
 風情  
 蓮子











後化の京都東門外の蓮花坊にて  
 中井波濤泉寺の住持に在りて  
 一人一生の志を白扇集との文に  
 長の備置正のふ坊主の流を著し  
 故に満堂の汝が性のおごさるるを  
 研で小刀かしの波をむかかみ  
 これに日さ布をひてむかひの自を  
 ける道理あり入の白へ水波を  
 一の狐かを養ふふことあり  
 茶を汲それの香の数を汲ありし  
 筆をこれの春の日を揮ありし  
 竹田う人形あり人ふも土汁の浪あり  
 あるふこそさるる汝の癖の漫と  
 毛で湯とも粥ともいれがさるるを  
 絆とありて静るるを用とさるるを  
 生波をふとのふにこれの波坊主の  
 きて自傳の癖の事や波の癖の事人の  
 流りやとさるる個満堂の二字をひて  
 汝の波の万福を傳へ汝の心ありき

八てさるるの人多く細粒集れて甚  
 小波一と箱の中も竹葉を流す  
 老のくれて汝のふにさるるの  
 翁波後ふの浪の双林寺小波の  
 ときて碑をさるる自傳をさるる  
 あつとさるる むすのふの 名ありあり  
 女波集の されありの ふありあり  
 ありし世の どのまをさるる 著ありあり  
 その五月の どのまをさるる 著ありあり  
 汲てしき されありの 著ありあり  
 流まをさるる ぬう川や 波をさるるの  
 さるるさるる その波あり そのまあり  
 のつ秋風の やうりけん 波をさるるふ  
 とさるるさるる 著ありあり 人もさるる  
 身とさるるの さるるさるる 波坊主の  
 著ありありあり

一の流を祀り東花坊西花坊  
 梅の花の御あり波の山田ありて  
 著ありあり  
 享保十六年二月十日没す

井波後化

春待

や

札

拵

書此



東花坊支考

秋書

軍虫

悲

吉野山





許六は江右青根の武士森川氏あり  
 五老井といひ又兼の佛と号し其の  
 強雄ふ志て佛書教多撰せ世道と  
 佛書の用待をみし其筆論を好む  
 風雅を志せむかふふあり餘り  
 何の爲むむや同種のもこのむ風雅の  
 されば画の筆も作らむ風雅の筆の  
 筆子とある特文を書くと先かま  
 せりある人の子入筆の賛ふ  
 儒家何れが猶子と入て道  
 学を習ふて曰のろこふ松樹七年  
 の老のいふ紙かて生し南阿三奉  
 小若て幅まるふ由り由りてふ  
 本箱ふすつある根のふすすか  
 發りまゝの結情あり

松の痛くそよ風の時はそよ風  
 かんきんのすゝめ秋の暮るるれ  
 拾女丹波國栢原の里田氏の娘と  
 幼きあり同種をこのとと方の時  
 雲の日はこのまのくの下弦の夜  
 御を奉給法中ふ学びにそそりけ  
 れ酒の守人翁の如くはそそりけ  
 奇也を奉給ひて  
 栢原ふれりや拾をくそよの玉  
 中奉まで風雅ふ拾ひて海法ふ  
 小心をあつてあ時々の筆を轉  
 て用々小情を奉給ひ一ひひひ  
 て風石のうらふ玉を拾ひ泥中ふ  
 こが子をぬる心地してあつて後  
 舞をとりて男子をのりて其て無  
 小ふて盤柱禪味を降とて道とあり  
 真剣と号し其格道のふす其のふ  
 加ひ終小橋に千花寺の傍ふ  
 庵を修り愛小修て  
 秋風の吹くるかふふ系柳  
 んりともちり夕一う那



五老井許六

青

海若

和光の

若

心



たてふ女

栗の

徳

や

身

女節花







牛老の二河玉屋助との下り...  
 久あらの...  
 時主人村...  
 空...  
 小...  
 う...  
 人も...  
 せよ...  
 昔...  
 ろ...  
 雄...  
 名...  
 を...  
 村...  
 外...  
 で...  
 け...  
 その...  
 死...  
 精...

後...  
 せ...  
 こ...  
 踏...  
 て...  
 の...  
 家...  
 さ...  
 ふ...  
 甲...  
 て...  
 風...  
 森...  
 う...  
 あ...  
 日...

足助村牛老



み...  
 目...  
 き...  
 え...  
 蓮...  
 の...  
 花



入...  
 の...  
 い...  
 み...  
 な...  
 の...  
 月















能順の京都の社司にて連舟  
 小達一なるく元且み大内へ  
 召れて連舟の点をやせしむ  
 所感感ありて神ありんを  
 つる時時けさるやのをも  
 その後かまふ守の指さふあひて  
 松の枝松葉小結くを伴く折ふ  
 芭蕉の國行折くといはるる  
 是る小能順はてりてあり  
 旅ふおよび能順は折して連舟の  
 ことひ国へかくもやとらふ

秋風ハ芒吹くくゆへん  
 秋風の芒吹くちるまへん  
 け二を書き出さるるその將  
 軍はけがこれなり  
 山さむし心の夜や水の月  
 け向をまかぬれは能順のち  
 まらま意をささるる教目と  
 めて能順はるるべとらふ

を業とて能順をこのみし  
 翁小まごがひ松葉の撰ふ加そ  
 り其句能わのつらう特情あり  
 上とくと下とらるる雪や秋の空  
 物よけや管のうへ冬の木立  
 灰まてく白梅うらむ根根が  
 己らうひて藤のむのそ流が  
 禪寺の松の落葉や林を月  
 九兆不運ありて能順はるる  
 白もふ能順はるる能順はるる  
 いのまの着のほよと能順のま  
 うげらみの身ゆめゆめ能順の  
 ねて身のおじまて能順の苦を  
 のがれまはるる能順はるる  
 骨葉の折られるる能順はるる  
 かんまはるる能順はるる  
 かくよまはるる能順はるる  
 ありぬいとあむべんあり

能順  
 今  
 志  
 中  
 等  
 水

お  
 川  
 心  
 九兆  
 筋  
 の



松風八幡宮小田原町松風宮...  
 この魚沼をみて見仙...  
 の入りに見早く世を去り...  
 を得て願ふ富貴といふも上...  
 て耳が遠く松風の音を...  
 遠行の思ひわつ時松風と...  
 を見送つて山林ふと見せ...  
 むるれん松風をこぼしけ...  
 中あも山松風あつらんや...  
 松風の音をききあつらん...  
 の徒ふあつらん松風の中...  
 うらん松風白目小松走を...  
 の喧をききあつらん松風...  
 松風あつらん松風あつらん...  
 も祀る松風宮ひらねて...  
 は松風の音をききあつらん...  
 いよいよや我身も去る月...  
 八十余ふと京保十七年...



越人  
 松風  
 花  
 子  
 子  
 子



松風  
 松風  
 松風  
 松風  
 松風



生約万子ハ加及金海のすあて世々  
 家富しうり翁の能を算念ひく御  
 志を通る海北國行辨の如く金  
 沢へ立寄り専宅を存するふ折去  
 由他行して遠くを悔ひひたり裸  
 馬小策を頼て路を慕ひぬり松  
 任めて追つて鐘別をたるとりす  
 女秋の傍の道にれを救ひ風流の  
 あつとて病て解人をたせむせのり  
 ね及び作六をたて對面をひそむ  
 小許六種之儀をたし屏風を隔  
 て人ふ遠く万子能友と信らんふ  
 いうて屏風をへてんやと信らんふ  
 ひて酒をたせ信治教別ふ及び  
 尊らんくたれと相すみて處  
 由思れさるる風雅ふ懐く大ま  
 の人ありは相  
 信ぐみ事尾上のねいぬあり  
 岩壁を一同くひのこころい

いひつら後浪くしく甲及び小佐芭蕉  
 小波をたせ信をたせある時翁を信  
 ひ梅林ふのり終日與せりあり  
 梅白くそのふをたせ信をたせ  
 るを信和録のたせあるたせたせ  
 花ふふのの葉家ありこの常光  
 藝とをたせ信をたせ信をたせ  
 るをたせ信をたせ信をたせ  
 と笑ひけりふ事良ゆこれとて  
 痛む傍のなすく梅のさうりか  
 又流川小魚の如くを翁同ひさふ  
 能はといふ能ぬりといふを  
 勢ひあり氷きつて流津魚  
 骨良翁の形神のともありしが  
 道とていひ別とて  
 内まつくそとれ信とも花のむ  
 翁の後後悲しむ墓ふたあり  
 翁を慕はんそこれらふあり

生約万子



煤をた  
 や  
 け  
 茶屋  
 ふり

曾良  
 春れ  
 梅の  
 乃  
 堂  
 籠





北枝はかき合源の研師にて能  
く芭蕉の門人ありて芭蕉の  
火災ありて北枝の家も焼く  
くくあまの傍ひきこりし  
北枝平筆ふしと

かき合源の研師をわくそいなり  
くそは又北枝のあふ焼くは北枝友  
徒者人先小走り其りて以前  
筆情いりといひしきまぢれ  
ゆふとも小枝も筆もそと  
けがりのうらふふもさん  
北枝こゝにて

ゆふとも小枝も筆もそと  
そのまの茶をうくおそら  
北枝の友集して焼く筆といふ茶  
あまの傍ひきこりし  
まをそく保をあくくやの村  
文學も流北枝も名うた人あり  
北枝の井坂も流小枝も流

あまの傍ひきこりし  
ゆふとも小枝も筆もそと  
そのまの茶をうくおそら  
北枝の友集して焼く筆といふ茶  
あまの傍ひきこりし  
まをそく保をあくくやの村  
文學も流北枝も名うた人あり  
北枝の井坂も流小枝も流

霜月やあふはるれ  
あまの傍ひきこりし

北枝  
山  
公  
花  
の  
室



白炭  
何  
心  
は  
ぬ  
子  
の  
葉  
の  
好









大野秀和の西國の太守お仕へる  
 豪傑の武まかりし御由ありて  
 懐くせしむる武道を忘れざる  
 ち燃發しして西刀を帯せりあふ  
 其南あまのてあおがことを  
 手笑へるり中云まるりけあり  
 秀和は武をたふふのこりあひか  
 折るる西國の夜のとまふとき  
 船お行あひらればあまをうけて  
 いふに南河が方あてあひの  
 正しせしむるあ煙の業を  
 常子務負せよかの柄おを  
 うけり其角をいふあもさるこ  
 ちりて送極お思ふむむる相子  
 みるんをあまのまなはまを  
 まあふくと極いけを履おふ  
 りらひごさるるれとれをひん  
 けめとあひてあはる



いささかおまをるる庵の苗の苗  
 おんをををを  
 清り対ハ沐も冷てし  
 依兄の叔船もてと糸のこた  
 ちのくがふんあはるるああか  
 ちを道ふ依こころ  
 の後くこふふをて奉の書  
 老行柳の時物いひ流の倍お  
 及び路通舟一音あまをて  
 一あまのるる世由後の特あふ  
 いづこも草のやうに  
 頼敷とて路通を頼と頼と  
 ちまべると休身の時を  
 吐く正法ふ勝れがふふ  
 これも後者の志を  
 破門とあれども翁後妻のころ  
 罪をゆるしこころ









大高源吾郎の事  
 其行状の世の人の心を  
 風情を懐きあり

日本をひていざあまの山嶽  
 初ね魚の幸子の四季の行  
 蘇もよくまて山田宗瑞と交り  
 懐死の舟をそぐんを解き  
 方を終日廻り西國橋をそぐ  
 わの大きな舟をそぐをそぐ  
 源吾郎の事あり

その翌日船入船をそぐ  
 春帆の事あり

春帆の事あり  
 其行状の世の人の心を  
 風情を懐きあり

大高源吾郎



桑乃弓

富森春帆



乃來の事







秋の坊は加賀のしるし 後法祥とて  
は歴々 湖南の幻住庵に傍ひけり  
世の燕 鶴とてめで

我病の秋のちのさかきを死せり  
秋の村も 四世の翁のれは世の  
風流のこころとねんごのふゆり

わがて死ぬけしは見えぬ世の夢  
道をのらして 推ふ久り せむせむ  
勢くくふう 本を求めぬふに長一拜  
の外なきをよまのく 物陰の巻  
残ふの舟へ 岸をさうとて

さむらひの山よりわたととて  
もはくちのあの人をこひて死  
これ炭の字を 読してよみぬ  
海をふりて 世を人の死後 未だ  
の流るゝ兄弟 若しとて 正月四日  
旅友を 来りて たる 秋の坊曰今  
吾を 齋を 祀まらばいふこと

い月四日よるづ 世を去ふは  
此節 秋の坊 齋の 祀を せむ  
く支考 せむ 世を 祀 齋 祀 せむ  
へ 梅 菊 の 流 流 を せむ 中 比 芭 蕉  
の 門 入 入 入 入 入 入 入 入 入 入  
とも 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何  
ぬる ちの 彼 彼 彼 彼 彼 彼 彼 彼  
外の 外の 雲 雲 雲 雲 雲 雲 雲 雲  
ごう 楽 心 の 長 長 長 長 長 長 長 長  
交 交 交 交 交 交 交 交 交 交 交 交  
を 生 生 生 生 生 生 生 生 生 生 生  
桐 干 の 花 子 子 子 子 子 子 子 子  
の 香 を ば ば ば ば ば ば ば ば

白雁も 眞あり  
秋柱のさかかのくとみろの月  
けいそく せむ せむ せむ せむ せむ  
海辺のごとく せむ せむ せむ せむ  
生 生 生 生 生 生 生 生 生 生 生  
うらやま せむ せむ せむ せむ せむ  
あまの せむ せむ せむ せむ せむ  
鏡 とも の 人 あり

秋の坊



徳元



細代守











その女ハ伊勢山田の唐多利和歌  
をゆく一織借又佳焼み今一時  
軒一有が妻とあり一有段後には  
もるせ初り大和を巡り紀行の吟  
歌ありいせを立宮川小

色めいもつ所り小妻の歌が  
よせのて折ゆく妻のまよ  
伊賀被ふ  
山松のちりく小妻はくも  
ねがごうる人よるをそね  
たへまのまんごを相  
衣えみづるおぬ衆御  
法座きまて

二まのちりくそま若の歌が  
白ひ女の優みを求め妻は  
貞操を守りて佛の座をも男と  
席を並べん後和鏡と改め京保  
土年四月廿日七十四にて終る流川  
雷并念仏並ふお蘇

指を指し伊勢の唐多利和歌の  
人となり京小傳の文段の愛あり  
うきろ向の達々の賛ふ  
ちりくむけ酒がいのりくまの餅  
市袋の袴ふ  
小袋小太ふ入るくむごら  
びるを装束の装束はあはれは  
てのいさごうで我るいそ  
唐多利の歌ゆ実つて終るの歌  
とまへ一とまへこれと教へて終  
り後と向く流の意味をといせ終  
程をきけんわ高着て  
あるやいのりぬ物そのあ人よ  
まのみのまがらもさめ終る  
指く終る  
ゆめお非あめお生るく終る切  
さあて苦をまら終るのま  
さへ小終るくあつ物を終る人小  
あだり景ををるあて  
終るむけん終るまのり終るま  
けのをゆく死まら

園女



花はまよ  
歌  
旅  
も

権と庵



水子  
何  
苦















二川の戦中富山の邊に於て其の太  
守の如く武道におおしめし入りあり  
蓋門の如く持ひて風洞終あり  
琵琶くくと松風夜やひされ  
ある村都の如く人々を思ひし  
お能友をば世をんを思ひし  
の顔ひをおせふさうあうあを  
てか懸まあちりひさうふ止のん  
ありこそもい何れその邊家の  
由よふ辰と月盤そのこちち入道と  
まりなきをききしとて

津津社堂の邊に於て其の太  
守の如く武道におおしめし入りあり  
蓋門の如く持ひて風洞終あり  
琵琶くくと松風夜やひされ  
ある村都の如く人々を思ひし  
お能友をば世をんを思ひし  
の顔ひをおせふさうあうあを  
てか懸まあちりひさうふ止のん  
ありこそもい何れその邊家の  
由よふ辰と月盤そのこちち入道と  
まりなきをききしとて

















蛙井の産物ゆが御遊を  
奇才の人と云はれたるに飾りて  
折ともかまへりてはるるのこころ  
宗を人おまへりて

雪のあふふ房りてその影を  
こひに余りふ静て

空をこりぬ日ぐらうのこころ  
命を改れ行折ふおとそ

おふ出で度きなりん井ノ権  
法新せんともふ別れをうげ

その人相普をきてあつぬ御  
多うめらやんまのあつぬ御

尾おとめはうすまのあつぬ御  
流は流りふは日せき

夕うやまれのつゆぬれを  
宝曆二年の秋

のこふ候名んこれまをまの  
はるを辞せりて死に風流の通

よふ英傑とのふべ

能徳の町に田舎住りて  
馬を遊ゆそ日遊ををせん  
お思ふとある時

たる工頭もや胡蝶の香の香

あつぬ御の香の香とせん

五月のあつぬ御の香の香

あつぬ御の香の香の香

のこふ候名んこれまをまの

紅梅このふたふた遊ひ遊

づけりて家ふりては徳の門

入て御遊をもんりて者なれ

母あつぬ御の香の香の香

ば徳徳の遊ひのりふ一討

ばつぬ御の香の香の香

警やあつぬ御の香の香

かのあつぬ御の香の香

徳徳宝曆四年土月は日

押上村大雲寺小葬と

東々庵 蛙井  
わさる  
よふ英傑  
若ぬばこ



徳徳  
若ぬばこ  
あつぬ御  
あつぬ御





糖酒の京室町万左衛門の二のりて  
 行きて西のまの楽の楽と  
 不の中み奇ありの量本山して  
 道不迷ひ四日野み休後常れ景  
 歩の歩は中も死ぬるははははは  
 之と富主様現みけりておもそそ  
 竹の竹ははははははははははは  
 取くもをををををををををを  
 もとぬくふして谷の向みか敷あれ  
 そそふのり候ふみあふみあふみ  
 ろた多の本熊う山づ由通ふあふ  
 ぬりのと強あごころせむごころ  
 ぬくも甘露のぬくもぬくもぬく  
 始て自處らふるとぬくぬくぬく  
 舟中教奉行の記を世に  
 徳とそいとたじれ書あけり

船水の橋及びお郡別村の人  
 船七艘めぐる豪華あるれども  
 教養あつてまづ成るははははは  
 異風を好む或年の秋ははははは  
 ぐ風将ををををををををを  
 ああふふ瓢水行清き水はははは  
 てぬくぬくぬくぬくぬくぬく  
 ふ人といふありあつとふあふ  
 ぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬく  
 こゝろぬくぬくぬくぬくぬくぬく  
 ある事上方へはははは  
 け岸も袖ははははははははは  
 母の妻ふまふのうぐ  
 されいとてあふるともまふれは  
 達すのうまう向の夢ふ  
 親されいじもまふのうぐの事  
 悟道の白ふ  
 有とててあふるともまふれは

百井塘雨



声 係 小 菰  
 も ぬ ぬ  
 め ぬ ぬ

滝野瓢水



かつ ちり  
 ね ぬ  
 去年の  
 の ぬ







建凌岱へ建部あるべ建の一字城  
 用由成草事門をい建雷積の  
 神の袋あつてうあかとい自船号  
 を原成と名り又理あうの故の  
 章五入後区と称し画路を  
 我とのひ著述の本西山物語を  
 理物語の古体力役名りて綴り  
 治冷の句此このよふあつて考あ  
 或人との名不傳うて故を考  
 といハ孤質の故を指領の積を  
 女美待れ一人れど故深ふて  
 古学を業とせらるうと思へ又画  
 をりて身とてしき傍とあると考  
 還俗して俳作とあり碑とある  
 碑とあると考ふてういふ人多り  
 疑波およしての陰と成人のよ  
 ある者多といふ幸ハあて  
 安永三年三月十八日歿ス  
 牛ノ山弘福寺に葬

けん けんろう たい  
**建凌岱**  
 ひる  
**昼の**  
 乃  
**坂乃**  
 や  
**夏や**  
 むら  
**むら**  
 りも  
**羊は蔓**



也有ハ尾陽のすうて柳ふそい  
 ふ名あり翁衣ふあつて 柳の飛  
 一 飯ハ石の校を守る  
 一 茶のこのころをまら茶の盆か  
 一 けツ茶ツ酒の者より限銀盆  
 一 精造の外を遠くへまら必考を  
 一 用ひ豆府ハ菓子ふあつて多の  
 一 湯あり  
 一 一 柳さく五こんとどりの手お柳が  
 一 一 薬のあつてあつてあつてあつて  
 一 一 柳の行燈あつてあつてあつて  
 一 一 柳のあつてあつてあつてあつて  
 天明三年六月廿日十二まで  
 右端

よこみ ちや  
**横井也右**  
 さ  
**生娘の**  
 袖  
**袖**  
 あ  
**あ**  
 し  
**引**  
 さ  
**稚子也右**





大徳寺太へ空居士と称し  
室中蔵二世を嗣ては道の氣韻  
をこころに秘蔵を好て空閑  
ふきもあつて送るもあつた  
二つはうたて佛一てひらの  
理井や極るの世の苦の疾  
進れて年月小長うそまうの  
を流の方の修まてて白と云  
白狼の猫をも捨つむの株  
深川甚意庵の旧地を慕ひ我寺  
要津寺北中小古池の形をう  
小堂の蒼蒼の本像を安置し  
同不の奥小池をみるみこころ  
像を置て後坊と称し斯像を厚  
く道を守りしれはる身像の者  
身四時の吟巻下にきて生像の  
編集多々天正七年九月七日  
聚七十歳要津寺  
俣塚のうらまふ草と



編者

緑亭川柳

肖像

雄齋國輝

真寫

楓園玄魚

彫工

江川仙太郎

小井居編集

# 續俳人百家撰

諸名家揮筆

此書の新古の年代をころころ前帙におれ  
るを拾遺し菊岡沾涼乾什完来白雄  
宗瑞一茶し二成美道彦士朗巢兆小  
つり近うの蓼松蒼風梅室卓池り  
かび名吟を撰て正しき實傳せらる  
俳話のありうたそのまをのま

嘉永八乙卯歳次孟春發行

東都書房

甘泉堂

芝神明前  
和泉屋市兵衛板



